

羽柴秀長の実像—天下人秀吉を支えた「弟」の生涯—

柴 裕之

はじめに

- ・2026年NHK大河ドラマの主人公、羽柴^{とよとみの}(豊臣)秀長とはどのような人物であったのだろうか。その生涯における活動を確認していくことで、彼の実像にせまるとともに、兄の秀吉との関係、秀吉・秀長兄弟のもとで豊臣政権がどのように展開していったのかについてみていきたい(なお、実名は「秀長」で基本統一する)。



羽柴秀長像

1、秀長の出生と幼名

- ・生まれは尾張国中々村(愛知県名古屋市中村区)。父は兄の秀吉と同じ、織田大和守家に仕えた在郷被官の妙雲院殿(天文12年〔1543〕8月死去)、母は天瑞寺殿(大政所)である。
- ・きょうだいには、兄の秀吉のほか、姉に瑞龍院殿(いわゆる大和郡山市春岳院所蔵「とも」)、妹に南明院殿(旭)がいる。
- ・江戸時代末期に編纂された『系図纂要』(国立公文書館蔵)では、天文9年(1540)3月2日に生まれとされる。これに対し、大和興福寺(奈良県奈良市)の塔頭・多聞院の僧侶であった長実房英俊が担当を務め記した『多聞院日記』では、享年は「五十一」とみられ、逆算すると、生まれは天文10年(1541)である。
- ・奈良国立博物館の所蔵文書で、重病の平癒を期し作成された天正18年(1590)10月吉曜日付の秀長都状の存在。
→①「羽柴大納言豊臣朝臣秀長」から、秀長は亡くなるまで「羽柴秀長」であった(羽柴は苗字、豊臣は氏姓。これは秀吉とその一族も同じ【黒田：2016】)。
②天正18年時点で数え51歳、逆算して秀長は天文9年生まれである。

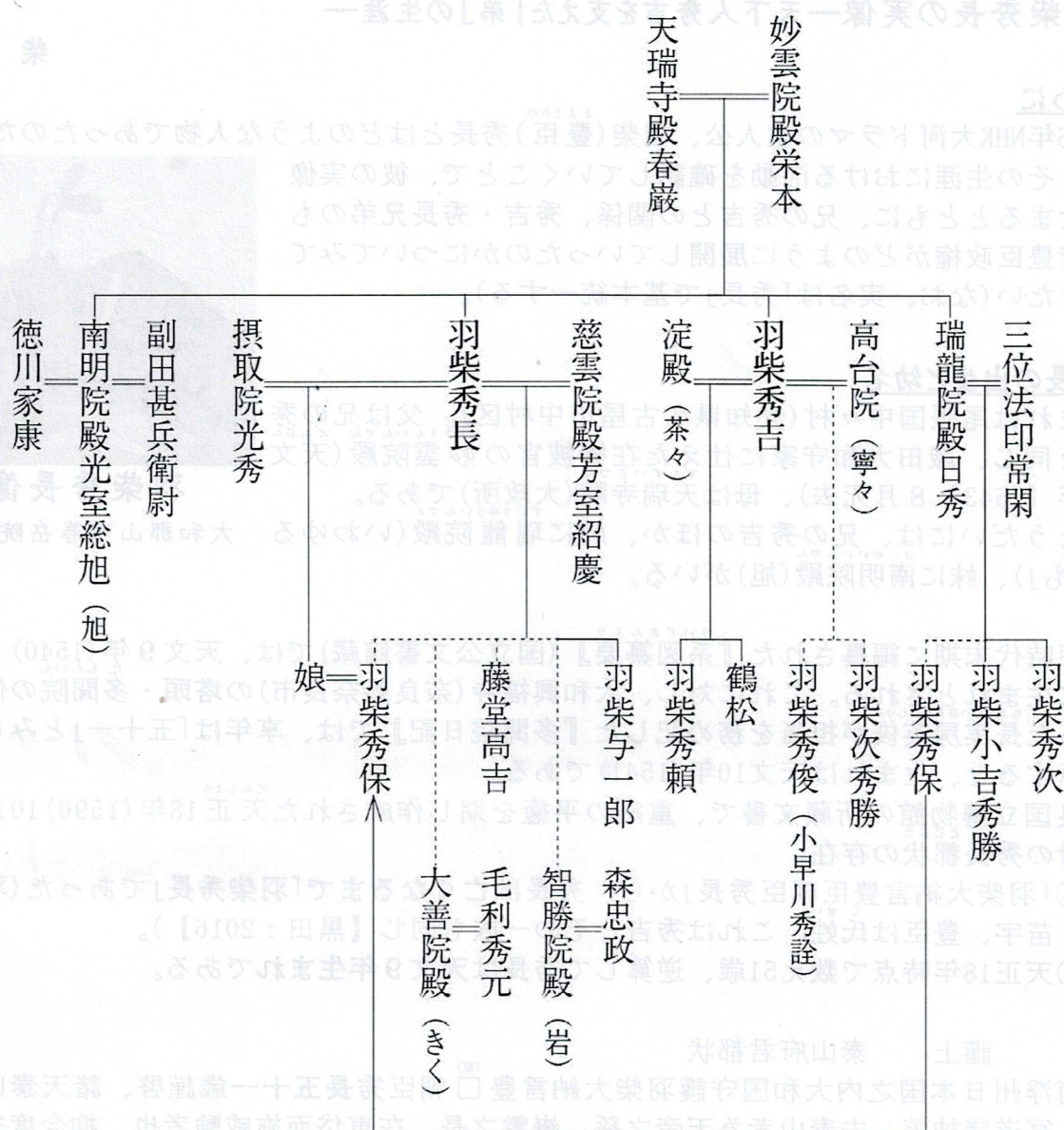
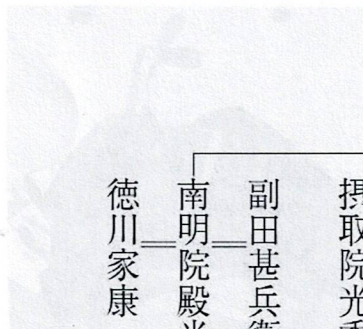
謹上 泰山府君都状

南浮州日本国之内大和国守護羽柴大納言豊^(臣)□朝臣秀長五十一歳謹啓、諸天泰山府君・冥道諸神等、夫泰山者為天帝之孫、嶽靈之長、在東岱而施威験者也、抑今度秀長病氣、其慎不□□茲欲廻運命長久、子孫繁榮之籌、不如仏神加護之助、肆為保壽命忝吉曜、從今夜設一七日之祭場、抽精誠備十二座清供、銀錢・鞍馬・白絹諸撫物等致礼奠、所祈者不知魂魄颺不着身、其精神三魂七魄皆本還五藏六府、又以無變魄子令帰来、秀長病氣早本服、彼三十六衰七十二厄、九厄三灾、邪氣怨靈之崇、厭魅呪詛之徴、悉以遥避之遠以退之、延年益算、運命長久無恙、転凶為吉、怨靈消滅、悪魔降伏、物恠不成崇、心中諸願悉成就円満者如神明之灵鏡、奉祈秀長五十一歳謹啓、

天正十八年十月吉曜日羽柴大納言豊臣朝臣秀長五十一歳謹啓

*朱字、太字は異筆で墨書。読みや返り点は省略。

- ・幼名は一般的に「小竹」として知られる。しかし、秀吉も筑阿弥の子として「小竹」と呼ばれていたことが、『太閤記』、『太閤素生記』にみえる。また尊経閣文庫所蔵の『太閤素生記』では、秀長が「小竹」と呼ばれていたことについて、「是ハアダ名也」と記す。
→「小竹」は渾名で幼名ではない。幼名はわからない。



羽柴家系図

*.....は養子

* 柴 裕之編著『シリーズ・織豊大名の研究14 豊臣秀長』(戎光祥出版、2024年)から転載

2、織田家への仕官と活躍

①織田家への仕官

- ・ 兄の秀吉は早くに家を出たのち、小瀬甫庵著『太閤記』によれば、永禄元年(1558)に織田信長へ奉公、その後働きを賞されて織田家臣となり、永禄8年(1565)までには「木下藤吉郎秀吉」として、織田家の部将へと出世している。

- ・秀長が織田家へ仕えた具体的な時期は不明だが、永禄8年以前ではないだろうか。初名は「木下小一郎長秀」、「長」は信長からの一字拝領(偏諱)であるので、その立場は信長の直臣で、秀吉に附属させられた政治的・軍事的配下である与力の立場にあり活動する。

② 秀吉一門・羽柴小一郎長秀へ

- ・その後、秀吉は織田家中のなかで頭角を現し、元亀4年(天正元年、1573)7月20日以前には、木下から羽柴へ苗字を改姓(「離宮八幡宮文書」)。9月には江北浅井家の滅亡によって、その領国を与えられて、長浜領を支配する織田大名となる。この時、秀長は「木下小一郎長秀」(「西村文書」)のままで、兄とは苗字が異なる立場で活動している。
- ・秀長が羽柴名字でみられるのは、天正3年(1575)11月のことで(「高橋文書」)、それ以前に秀吉から羽柴苗字を名乗ることが認められたと推察される。その契機は、おそらく同年夏に羽柴家居城の近江長浜城(滋賀県長浜市)の築城がなり、長浜領の支配が本格化していくなかで、秀吉の一門として位置づけられたことによる。

③ 中国地方の攻略参陣と但馬国竹田領の統治

- ・織田家が安芸毛利家と敵対すると、天正5年(1577)10月、秀吉が中国地方方面の軍事司令官になると、秀吉に従って活動、特に但馬国の攻略で活躍する。

- ・秀吉は、一時、三木別所家をはじめとした播磨国衆の離反に苛まれるが、天正8年(1580)には播磨・但馬両国を平定、翌9年(1581)には因幡国を平定、これらを「筑前守殿御分国」(「佐伯文書」)と呼ばれた羽柴領国に編成し、播磨姫路城(兵庫県姫路市)を居城に、自身の判断と運営のもとで統治し、また備前・美作の各国と伯耆国東部の従属国衆を政治的・軍事的配下の与力として従えた、織田政権下の有力譜代大名となる【柴編：2020】。



本能寺の変前の羽柴領国

- ・そのなか秀長は、但馬竹田城(兵庫県朝来市)の城代として、天正8年(1580)以降は織田大名秀吉の領国下で但馬国の大部分(竹田領)の支配を担当し、自身の判断で知行宛行・特権保証をおこない、諸将を統率するなど、羽柴領国における執政者の一翼を担う。

3、本能寺の変後の政局から豊臣一門大名へ

- ・天正10年(1582)6月の本能寺の変時は、兄の秀吉のもとでと備中高松城(岡山県岡山市)を攻囲中であり、秀吉に従い畿内へ帰還し織田軍に加わり、山崎合戦で勝利する。
- ・山崎合戦での勝利後、惟任(明智)光秀の領国であった丹波国の平定へ。平定後、丹波国福知山領(京都府福知山市)を与えられる。
- ・織田政権の再始動と主導権をめぐる対立、事態は織田信雄・羽柴秀吉らvs織田信孝・柴田勝家へ。このなかの天正11年(1583)3月に受領名として「美濃守」を名乗る。

・織田政権内部の対立は信雄・秀吉が勝利、秀吉は当主・信雄を補佐する執政として活動、さらには天下人を意識し始めて、摂津大坂城(大阪府大阪市)を築城する。そのなか秀吉は、安芸毛利家との外交交渉と備えのため、播磨・但馬両国の諸将を率いる一方で、羽柴家の拠点領域であった姫路領の経営を任され、但馬国竹田領とともに支配をおこなう(丹波国福知山領はこの際に返還される)。

・秀吉と織田信雄との主導権をめぐる対立、天正12年(1584)3月～11月にわたる小牧・長久手合戦が勃発。秀吉は伊勢方面の攻略などにあたった。

→このなかの天正12年9月に、「羽柴美濃守秀吉」となる(「西順寺文書」)。同時期に甥の信吉も実名を「秀次」に改名、織田家に代わる天下人秀吉の一門の立場を表明する。

・小牧・長久手合戦の羽柴方の勝利、翌天正13年(1585)1月、秀吉は伊勢長島城(三重県桑名市)の織田信雄のもとを訪れ交渉、2月に上洛させ、秀吉への臣従を示させる。

→秀吉が名実ともに天下人となり、織田家との「下剋上」を実現、「豊臣政権」の成立。

・翌3月には紀伊根来寺や雑賀一揆など和泉・紀伊両国の敵対勢力の討伐戦に参加。

→和泉国と紀伊国の大部分を平定。秀吉より紀伊・和泉両国の統治を任され、岡山(直後に和歌山に改名、和歌山県和歌山市)を築く。

・続いて6月、土佐の長宗我部元親討伐の先勢を率いる大将として出陣、しかし阿波木津城(徳島県鳴門市)の攻撃に手詰まり、秀吉の出馬を「外聞」(世評)への影響を鑑み、取り止めを求める。秀吉は出陣を延期、その後越中の佐々成政の討伐に専念し、秀吉に四国出兵の現場指揮を委ねていく。

→7月に優勢な状況のもとで長宗我部方と和睦。

長宗我部家の臣従に貢献、今後の四国統治にあたっての差配をおこなう。

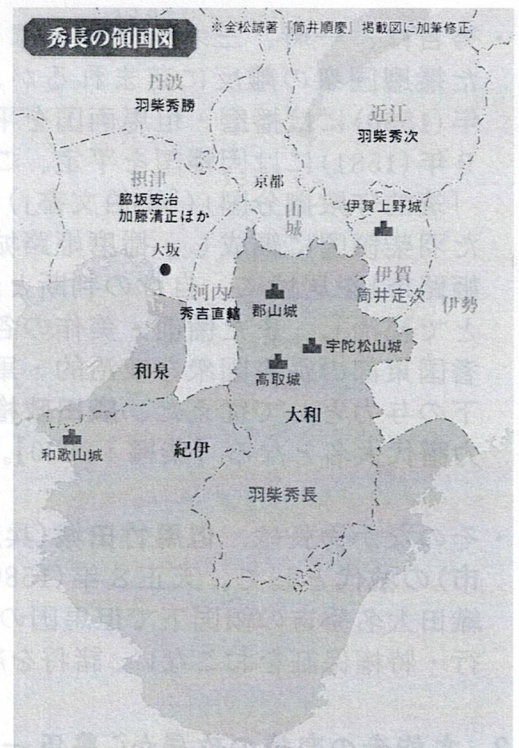
・秀吉はこの四国出兵での働きを賞され、閏8月に大和国を与えられ、大和郡山城(奈良県大和郡山市)を居城とした。これにより、秀吉は大和・紀伊両国の大名(「物主」)となり、土佐の長宗我部元親と伊賀国へ移封となった筒井定次がその麾下に配置された(『四国御発向並北国御動座事』)。

・領国は大和・紀伊両国、また和泉国と伊賀国には所領をもち支配、その領知高は後世には100万石といわれる(『高山公実録』ほか)が、75～80万石ぐらいでしかない。

・また領国内部には、従属国衆や秀吉の与力となった諸将(秀吉直臣)の領域も存在し、これらの領域には秀吉の支配は及ばない。

・熊野など紀伊国南部の平定は、一揆の蜂起があり、天正17年(1589)7月までかかる。

→豊臣一門大名として日本の中央である五畿内の南部に位置した大和・紀伊両国と和泉国の大部分と伊賀国の所領を治める存在へ。



羽柴秀吉の領国

河内編著『図説 豊臣秀吉』から転載

・秀吉は居城である大和郡山城の整備とともに、領国内に検地を実施のうえ知行宛行や寺領寄進を実施、給人や代官の不正には百姓の直訴を認めるという統治にあたっての整備

したうえで、領国支配は秀長の直接経営と羽田正親、桑山重晴、杉若無心、藤堂高虎ら城代によるそれぞれの担当地域の経営によってなされ、秀長はそれを統轄することでおこなわれた。ただし、秀長は豊臣政権の“一門筆頭の執政”（政権運営の宰相）でもあったので、領国不在の状況が多々みられた。それに伴い、大和郡山城にいる秀長側近の横浜良慶・小堀正次らによる中枢政務のもとで、領国統治は進められた。

4、羽柴家一門衆筆頭の執政としての活動と死去

- ・豊臣政権における秀長の官位

天正13年(1585)10月6日、従三位参議兼近衛中将(『兼見卿記』)

天正14年(1586)11月5日、徳川家康とともに正三位権中納言(『兼見卿記』)

天正15年(1577)8月8日、徳川家康とともに従二位権大納言(『御湯殿上日記』)

→秀吉、旧主の織田信雄(天正18年〔1590〕7月以降は失脚)に次ぎ、羽柴家へ臣従にあたり妹婿となった徳川家康と同位。羽柴一門衆では筆頭にある。

- ・豊臣政権での秀長の立場と役割

『多聞院日記』天正14年(1585)11月2日条では、仏法の破滅で国内秩序が乱れ「一揆ノ世」となったら、「秀吉ハ王ニナリ、宰相殿ハ関白ニナリ、家康ハ將軍ニナリ」との記述がみられる。これを豊臣政権にあてはめた場合、秀吉は政権の主宰者、秀長は執政(宰相)、家康は軍事司令官という位置づけになる。

- ・実際、秀長は羽柴家一門衆の筆頭に位置する執政（以下、“一門筆頭の執政”とする）として秀吉の意向に従いつつ、一門衆(秀次・小吉秀勝)や重臣を率いて政権運営に携わり、特に政権の「指南」(政治的後見役)として織田信雄、徳川家康、毛利輝元、小早川隆景、吉川広家、大友宗麟・吉統父子、島津義久・義弘兄弟、龍造寺政家、伊達政宗といった諸大名との関係維持のために奔走し、政権のもとでの国内秩序を乱す存在に対しては、秀吉とともに、場合によっては秀吉に代わり豊臣軍を率いる大将として軍事討伐に従事し、終戦・占領後には該当地域の戦後処理と統治のための体制を整備する、「仕置」の実務を指揮した。その最たる活躍が九州討伐と終了後の仕置における活動である。
- ・この立場と役割は、天下人秀吉の信頼する“弟”にあったというところに源泉はあり、秀吉の信頼を失った際は、秀長が“弟”であるからといっても、例えば天正16年(1588)12月に家臣の吉川平助による熊野山材木の不正売買が発覚した際に、秀吉に対面できなかったように、その立場の失墜は免れ得なかった。
- ・秀長は、秀吉からの絶大な信頼を得ながら、それに応える「力量」(判断とそれに伴う手腕、すなわち「才覚」)を発揮し続けることで、天下人秀吉の“弟”として、豊臣政権における“一門筆頭の執政”の立場であり続けたのである。
- ・しかし、その功勞の裏での激務は、やがて彼の体を蝕んで大病を患わせ、天正17年(1589)年末になると秀長の病状は重くなっていき、そのなか翌天正18年に相模北条家との小田原合戦が始まると、秀長は出陣せず、京都の屋敷で病の治療にあたりながら、畿内の留守居として守衛や朝廷との交渉を担当する。
- ・病状は、その後も「再発」、10月には「煩一大事」と重篤の状況をみせる。この病状に伴い、秀長は発給文書に桃のような印型の内部に「羽柴秀長」の印文を刻んだ黒印を押捺している(「金剛寺文書」)。秀長の花押は基本形は生涯にわたり変わらず使用されたが、印判の使用は、この病状に関係して使用されだす(図版は『国史大辞典』からの転載)。



羽柴秀長花押



羽柴秀長黒印

- ・天正19年(1591)1月に養嗣子^{ひでやす}の秀保と自身の娘との婚姻を決めた後、22日に死去。享年は52、法名は大光院殿前垂相春岳紹栄大居士。その生涯は、まさに天下人となった秀吉に尽くしてきたものであり、そこに秀吉の“弟”として求められ、己の使命に対し応え続けてきた、勤勉実直な人間としての彼の「実像」がある【柴：2025予定】。
- ・秀長の葬儀で導師を務めた京都大徳寺の僧侶・古溪宗陳は、自らが書き記した引導法語(「大光院殿前垂相春岳宗栄大居士秉炬」)のなかで、秀長を、秀吉の信頼が篤く文武両道で威張ることなく穏やかな人柄であり、戦場では軍勢を率い、世の中のあり方を問い続け、財を成した人物として評価している(『浦庵稿』)。この古溪宗陳の秀長評は、誤りではないであろう。
- ・葬儀は1月29日に京都や高野山(和歌山県高野町)、大和国の僧侶や参列・見物人が20万人以上もいて野も山も人ばかりという、盛大な参列者・見物人のもとでおこなわれた。また倭約家で、大和郡山城には「金子ハ五万六千余」、「銀子ハ二間四方ノ部屋ニ棟極テ積テアリ」という貯蓄があったという(『多聞院日記』)。
- ・秀長の死、そして秀吉の嫡男・鶴松の死去を受けて、豊臣政権は軌道修正の後、太閤秀吉・関白秀次のもとで「唐入り」(壬辰戦争)の実施へと歩みだしていく。そのなかで、政権の運営は、秀吉のもと側近によって主導されていく一方、徳川家康・前田利家が秀吉を支える羽柴家親類の有力大名として重用される。
- ・壬辰戦争の失敗による動揺、小吉秀勝・秀保の早世と文禄4年(1595)7月の秀次事件による一門衆の減少、秀吉の病氣と後継の秀頼の幼少という事態に、徳川家とは親類関係を強化、さらに家康・利家らは政権中枢を支える「五大老^{みようだい}」として活動する。
- ・そして、秀吉を失った政権内部の対立のなかで、家康は「秀頼名代」の立場から豊臣政権の運営を主導する執政者へと活動、それへの反発と奪還をめぐる対立が関ヶ原合戦へと事態を展開していく【柴：2024】。

主要参考文献 *画像・図版は拙編著2020および河内2025から転載。

- 黒田基樹『羽柴を名乗った人々』(角川選書、2016年)
- 同『羽柴秀吉とその一族一秀吉の出自から秀長の家族まで』(角川選書、2025年)
- 黒田基樹・柴裕之編『羽柴秀長文書集』(2025年予定)
- 河内将芳『図説 豊臣秀長一秀吉政権を支えた天下の柱石』(戎光祥出版、2025年)
- 柴 裕之「関ヶ原合戦前における徳川家康一羽柴家親類の有力大名としての実像一」(『関ヶ原研究会寄稿集』岐阜関ヶ原古戦場記念館、2024年)
- 同『羽柴秀長 一天下人秀吉を支えた“弟”の実像』(2025年予定)
- 柴裕之編著『図説 豊臣秀吉』(戎光祥出版、2020年)
- 同 編著『シリーズ・織豊大名の研究13 豊臣秀長』戎光祥出版、2024年)